

第3表 出開帳場所(宿寺) 地域分布表

	下駒(大塚・田白)					小生(湯島・本郷町)			芝(赤坂・青山)		計		
	谷司谷	雑司谷	本郷	王子	田白	川込	市ヶ谷	湯島	本郷町	麻布			
前期	11	1	34	2	7	2	8	1	12	6	1	78	7
中期	26	6	81	1	62	34	42	7	37	10	6	276	64
			0.61		(0.64)								
後期	48	16	72	2	100	78	17	3	17	4	18	272	105
			0.81		(0.91)								
計	85	23	187	5	169	114	67	11	66	14	52	626	176
			0.70		(0.81)								

(註) 第1表~第3表において、同項目中先の数字は日蓮宗をも含めた全体のもの、後の数字は日蓮宗のみのもの。

## 大我の日蓮宗批判

宮 川 一 敬

江戸時代における日蓮宗に対する批判は、宗祖以来、法

華唱題思想と、浄土念仏思想との宿命の対決にも似た、浄土系との批判論争がその大半を示していた。即ち、法華教学と浄土教学の対決であった。しかしこの様な教学論争のなかにおいて、大我の日蓮宗批判は特異な存在にあった。大我の字は孤立、白蓮社天眷といい、一般的には孤立大我の名をもって知られている。大我は宝永四年(一七〇七)

江戸に生まれ、十一才の時、自ら湯島真言宗靈雲寺の恵光の門に投じて得度剃染し、二十三才のおり感ずる所あつて従来の真言密教を捨て、浄土宗に帰し、鎌倉光明寺の称誉真察の会下に参じ、常に称誉の坐右に侍すること十余年、傍ら南北の学匠と交りを結び、法華、華嚴、戒律、禪等を参究する一方、儒学、国学、武技、諸礼等をも究めたやうである。ことにこの間と推察される時期に身延に登詣し、「師、某聖人、日蓮教学を学び、『唱題成仏論』を草したといわれている。その後大我は寛延三年（一七五〇）、山城八幡正法寺二十二世の法灯を継承したが数年にして辞し増上寺定月（一六六七〜一七五〇）に招かれ、江戸の姥池愛蓮庵に寓し、天明二年（一七八二）八月十五日、七十三才をもって示寂した。

大我の著書には、日本思想闘諍史の一角を示る『罪足論』四巻を代表に、四十有余を教えることが出来る。そのうち日蓮宗批判書は『柴朱論』、『抑虫論』、『曇華論』の三巻であるが、本稿においては「日蓮宗批判史の系譜」という立場から、柴朱論をもって考察するものである。

柴朱論は別名「破二癡連義」、略称「破二癡」と呼ばれ「悲哉如繫珠録者、雖吹毛求瑕（中略）不關繫珠録」と称している如く、了義日蓮の『愍論繫珠論』に反駁し、

宝曆十三年（一七六三）六月に出版された。しかし本書は従来の権実論よりも、むしろ宗旨の布教実践面に対する批判が主で、その内容は、

- 一、権実論に対する批判。
- 二、宗旨の本義に対する批判。
- 三、布教乃至信仰実義に対する批判。

等に大別することが出来る。以下右記の概要を述べると、一、二癡（日蓮聖人をさす）は天台の趣意を盗み、狐を使つては人々を勞惑し、四十余年未顕真実の文を信じては四格言と称し他宗を批判しているが、何故に七面天女、鬼子母神、狐、狸まで敬うのか、ましてや剃髮染衣、造仏營寺、引導下炬、祈禱咒願等の全てが爾前の諸行であるのにもかからず、爾前を信じない二癡が何故に爾前の諸行をするのか、これは二癡が権実を戯むれているが為である。

二、曼陀羅には大曼陀羅、法曼陀羅、三摩耶曼陀羅の三種類あるが、二癡の書いた曼陀羅は以上の曼陀羅のいづれにも属さず、雜亂はなはだしく本尊とはいえない。また蓮の字には仏蓮、鬼蓮の二種類があり、二癡の鹿題目は鬼蓮である。従つて二癡の徒に恠が多いのもこの故である。

三、二癡の徒は高坐に隔肝して頭を掉り、肩を張り机を叩き咳を高くして、吾が日蓮大菩薩は云云と誉称え、無難無病安産安穩長寿富樂を得ると説いているが、二癡の伝記をみれば災難だらけで、その徒は貧困の者が多く、白癩、赤癩にかかり、寺には童男童女の墓ばかり多く、どこに利益の証があるのか、ことに数珠、木剣を握り、婦人の手を振らしてその手に狐の術を使っている。この様な諸行は本山の敝命をもって制止すべきである。斯くの如き二癡の徒の教えを信ずれば無門獄に墮つるであらう。

等の大我の日蓮宗批判の内容は、当時、権実論、本迹論の参究に終始していた本宗の学僧を当惑させ、「宗旨の本義を以て、浄土教学に対応することは十分でなかつた。」

ところで大我のこの様な批判内容は、江戸中期頃、真宗の僧によって偽作された『大聖日蓮深秘伝』の影響によるもので、それを如実に示しているものに

二癡之徒闇昧無智不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>開<sub>ニ</sub>宗<sub>ノ</sub>本<sub>ノ</sub>致<sub>一</sub>、乃<sub>ハ</sub>欲<sub>シ</sub>審<sub>ニ</sub>昌<sub>ニ</sub>宗<sub>ノ</sub>門<sub>ノ</sub>種<sub>ノ</sub>種<sub>ノ</sub>為<sub>ニ</sub>華<sub>ノ</sub>說<sub>一</sub>、雖<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>信<sub>ニ</sub>彌<sub>ニ</sub>陀<sub>一</sub>、而<sub>モ</sub>口<sub>ヲ</sub>為<sub>ニ</sub>誹<sub>ニ</sub>謗<sub>一</sub>也、我<sub>ハ</sub>閱<sub>ニ</sub>身<sub>ニ</sub>延<sub>ニ</sub>山<sub>ノ</sub>久<sub>ノ</sub>遠<sub>ノ</sub>寺<sub>ノ</sub>血<sub>ノ</sub>脈<sub>一</sub>、以<sub>テ</sub>三<sub>ノ</sub>南<sub>ノ</sub>無<sub>ニ</sub>阿<sub>ニ</sub>彌<sub>ニ</sub>陀<sub>ノ</sub>仏<sub>ノ</sub>配<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>經<sub>ノ</sub>諸<sub>ニ</sub>佛<sub>ノ</sub>諸<sub>ニ</sub>神<sub>ノ</sub>及<sub>ニ</sub>六<sub>ノ</sub>道<sub>一</sub>、曰<sub>ク</sub>法<sub>ニ</sub>華<sub>一</sub>、一<sub>ノ</sub>大<sub>ノ</sub>事<sub>ノ</sub>日<sub>ノ</sub>蓮<sub>ノ</sub>相<sub>ノ</sub>承<sub>ノ</sub>血<sub>ノ</sub>脈<sub>ノ</sub>念<sub>ノ</sub>仏<sub>ノ</sub>至<sub>ニ</sub>極<sub>一</sub>、故<sub>ニ</sub>常<sub>ニ</sub>秘<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>申<sub>也</sub>、以<sub>テ</sub>三<sub>ノ</sub>南<sub>ノ</sub>無<sub>ニ</sub>妙<sub>ニ</sub>法<sub>ノ</sub>蓮<sub>ノ</sub>華<sub>ノ</sub>經<sub>一</sub>、為<sub>ニ</sub>平<sub>ニ</sub>常<sub>ノ</sub>行<sub>一</sub>、顯<sub>ニ</sub>說<sub>ニ</sub>宗<sub>ノ</sub>宗<sub>ノ</sub>差

別<sub>一</sub>、故<sub>ニ</sub>也<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>顯<sub>ニ</sub>彌<sub>ニ</sub>陀<sub>ノ</sub>於<sub>ニ</sub>言<sub>ニ</sub>語<sub>一</sub>、深<sub>ニ</sub>秘<sub>ニ</sub>強<sub>ニ</sub>為<sub>ニ</sub>誹<sub>ニ</sub>謗<sub>一</sub>、須<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>中<sub>ノ</sub>念<sub>ニ</sub>彌<sub>ニ</sub>陀<sub>一</sub>、吾<sub>ハ</sub>宗<sub>ノ</sub>極<sub>ニ</sub>意<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>彌<sub>ニ</sub>陀<sub>ノ</sub>威<sub>ニ</sub>力<sub>一</sub>、成<sub>ニ</sub>仏<sub>ノ</sub>得<sub>ニ</sub>道<sub>ノ</sub>者<sub>也</sub>、故<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>一<sub>ノ</sub>念<sub>ニ</sub>彌<sub>ニ</sub>陀<sub>ノ</sub>仏<sub>ノ</sub>即<sub>ニ</sub>滅<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>量<sub>ニ</sub>罪<sub>ノ</sub>現<sub>ニ</sub>受<sub>ニ</sub>比<sub>ニ</sub>樂<sub>ノ</sub>後<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>清<sub>ニ</sub>淨<sub>ノ</sub>土<sub>一</sub>、為<sub>ニ</sub>臨<sub>ニ</sub>終<sub>一</sub>、一<sub>ノ</sub>大<sub>ノ</sub>事<sub>ノ</sub>因<sub>ノ</sub>緣<sub>一</sub>、云<sub>ク</sub>云

がある。以上は『深秘伝』の「破邪教正章」、「詠歌口成章」、「法華秘密血脈ノ事」等の所論を引用したもので、大我の『紫朱論』における日蓮宗批判の系譜は、『深秘伝』の影響にあったと考えるものである。(註は割愛)

## 「ひたちのゆ」についての一考察

田久保 顕 悠

ひたちのゆについて考察するに方り本題は現在迄に先輩諸学者が諸書にとりあげて論述されておられますがそれを又ぞろとりあげ再々論ずるは愚挙に等しいと定めて御失笑をかうもの如く況んや粗忽の徒輩に於ておやと汗顔の至りでございます。

日蓮聖人とひたちのゆと波木井殿一族の関係